

昨年の今ごろ、共に暮らした犬が死んだ。うろたえた。散歩の相棒がいなくなリポッカリ空いた時間。たまにだが、リードの代わりに小さなカメラを持ち、夕刻、気の向くまま歩くようになった。

2、3カ月たった冬の日だったか、家の側を流れる神田川沿いを20分ほど下り、汽水域になる行き止まりの角にある屠畜場跡まで来た。いつの間にか取り壊され更地になったままで、町なかと言っているようなところに平気で存在していたのだ。

人気はなく、レール式鉄柵は開いており、中に入ってみた。微かに揺れる雑草に静けさが張り付いている。しばらくして、川っ縁の塀の前に立つ石碑に近付いて行くと、ふいの侵入者

にカモの群れが一斉に飛び立ち、オシドリ数羽も後を追う。鳥たちは驚き、僕も驚く。死が日常であった場所ので生きるものの証しに会う。

空き地の中ほどに戻り佇んでみると、重苦しい気配がヒタヒタと僕に入ってくる。牛や豚が染み込んだ地面に立っているのだ。

屠畜場

気を取り直し辺りに目を向けると、すぐ対岸には高校のサッカーグラウンドが見える。ここで僕は、断末魔

を耳にしながら毎日ボールを蹴っていたのだ。以来、当たり前の屠殺を当たり前に受け入れ暮らしてきた。しかし、その声は澱^{かたまり}となって消えてはいない。

取り残された地ベタや塀

をファインダーから覗き、何物かに向けて澱と一緒にシャッターを切る。ほとんど人は通らないと思っていた裏道の門の所で、学生が数人立ち止まり、拳動不審な僕を横目で見ながら何やら話している。そんな彼らはあの一瞬の声を知らず、



これからも聞くことはないのだろう。

門を出る。消えた屠畜場。どこか知らないところに移り、人に見えない、聞こえない場所で同じことが繰り返されているのだろう。しかし、生きとし生ける物、それぞれ

の運命だ。今日たま

たま引き寄せられるように足を踏み入れただけだ。たいた出来事ではない。そう自分に言いながら歩く。すると、干潟に放置された数杯の小船が浅い水の中に沈んでいるのが目に入る。「オオノ伝馬船(小型の和船)だ。まだこんなところに残っていたのか」と早速で近付くと、違っていた。木造船ではなかったが、

ここにある朽ち果ててようやく形を留めている小船が、深灰色の泥に埋もれ同化している美しさに釘付けになった。牛や豚はあつという間に人の中のみ込まれるが、この船たちは泥の中で生きていた。

犬の死、屠畜場、伝馬船。どこかでグルグル繋がりが、薄暮の中、家路についていた。

(吉田 淳治・画家)